九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

魯迅と漱石 : 魯迅の伝記から見た一考察 : 魯迅と漱石との比較論のための序章

潘, 世聖
九州大学大学院比較社会文化研究科

https://doi.org/10.15017/15977

出版情報：Comparatio. 3, pp.14-27, 1999-03-30. Society of Comparative Cultural Studies, Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

魯迅と漱石：魯迅の伝記から見た一考察
——魯迅と漱石との比較論のための序章——

潘　世聖

はじめに

比較文化あるいは比較文学という視点から、中国現代文学[1]の最も代表的な文学者魯迅と近代日本文学の頂点に立つ漱石を思想的文学的に論ずる際、伝記から見て二人の間にどのような関わりが存在するか明らかにするということは不可欠な作業であり、そして今なお問題点があると思われる。

従来、日本でも中国でも、魯迅と日本文学との関係（当然漱石との関係も含んでいる）については、彼は日本文学からいわゆる本質的な影響はほとんど受けていないとされてきた。例えば、かつて竹内好が魯迅と日本文学の関係を論じた際、以下のように述べている。「(彼は日本文学を受け入れたとき、) 主流を入れなかった。主流とか有名であるという理由で、世界文学からも、日本文学からも、何も入れなかった。かれが日本へ留学していたころは、日本では、自然主義がはやっていた。しかしかれは、日本の自然主義も、フランスの自然主義も入れなかった。(しかも、彼の日本文学の紹介のしかたからも) 日本文学にたいしても、かなり厳しい批判の目を持っていたことが想像される」[2]。しかし、後に数多くの研究によって、魯迅が明治35年から七年間あまりの日本留学期に、その後の彼の思想と文学の形成にかかわる深い影響を当時の日本文学の思潮からかなり受けていたことが明らかにされている。彼と漱石との関わりもこのような枠組みの中から考えなければならないのである。

さらに、漱石は1916年に多くの作品を残して、この世を去ったのに対して、魯迅は日本留学期の文学活動を経て、1918 年から中国文壇の大きな存在になり始めた。このように時間と時代のずれが存在しているため、当然ながら魯迅と漱石の間に対等な相互交渉あるいは影響関係はあり得ず、魯迅は一方的に漱石から何らかの形で影響を受けたことになる。

それ故に、究極の目標、つまり比較研究を通じて魯迅と漱石、それぞれの思想と文学の特質及び構造を一層明らかにしようとすることの前提として、本稿では、「文学」の問題を意識しながら、限られた資料をできる限り生かして、二人の伝記的な関わり、影響関係を整理、考察したいと思う。

一

魯迅と漱石はほぼ同時代人である。漱石が 1867 年に生まれたのに対して、魯迅は 1881 年に生まれている。漱石は魯迅より十四歳年長である。1902 年 4 月～ 1909 年 8 月、魯迅は日本で七年四ヶ月の青春の歳月を過ごした。1902 年 1 月、魯迅は南京にある江南陸師学堂付設鉱路学堂を卒業して、4 月に官費留学で海を渡り東京にやって来た。その時、漱石はロンドン留学の最後の時期であり、八ヶ月の後、漱石は日本に戻る。

最初、魯迅は東京高等師範学校校長の嘉納治五郎が中国人留学生の速成教育のため設けた弘文学院に入り、日本語をはじめ各種の科目を勉強し始めた。一年後、中国ではなかなか見られなかった社会科学や自然科学、文芸などの書籍を数多く耽読し、さまざまな新鮮なものを吸収し始める。当時の同級生の許寿裳という人には次のような回想がある。「弘文学院にいたとき、魯迅はすでにかなりの日本語書籍を購入して机の引き出しに置いていた。例えばバイロンの詩やニーチェの伝記やギリシャ神話やローマ神話などがあった」[3]。科学といえば、彼は明治維新以来日本で大量に翻訳された科学小説に興味を持ち始め、1903 年に、フランスのジュール・ヴェルヌ著、井上勤訳『九十七時二十分間月世界旅行』[4]を『月界旅行』という題目で中国語に翻訳し、同年 10 月東京進化社から刊行した。思想の面でも、例えば、彼の進化論への接近なども当時の日本とかかわっているのである。これについて、魯迅より遅れて日本へ留学に来た彼の弟周作人[5]はこうした証言を残している。「魯迅が T・H・ハックスリの『進化と倫理』を読んだのは南京にいた時であったが、しかし東京に来て、日本語を学んでからこそダーウィンの進化論が分かるようになってきた。魯迅は丘浅治朗の『進化論講話』に出会ってから進化学説が一体どういうものかということが分かってきた」[6]。魯迅の蔵書目録の中には『進化論講話』(丘浅治朗著、東京開成館、明治 37 ＜ 1904 ＞年) は入っていないが、同じ頃刊行された『進化新論』(石川千代松著、敬業社、明治 36 ＜ 1903 ＞年) が見えるのである[7]。

要するに、弘文学院時代、特に弘文学院時代二年目の 1903 年から、魯迅は当時日本に流行していた思想、文化思潮から影響や示唆を受け、さらに日本を通じて西洋の様々な思想学説に触れ、自分の視野を大きく広げた。言いかえれば、日本という空間に身を置き、自分の習得した日本語とドイツ語を通し、外国文化・文学への知識を広め、また関心を深めたのである。その上、在日中国人留学生の編集した雑誌などを通して、さまざまな新しい思想学説・科学知識・文芸作品を紹介したり、友人と国民性の問題[8]を討論し遅れた中国社会を改造することを目指し、自国民の思想を改造する精神啓蒙活動を始めた。それと同時に、そのような過程の中で魯迅と近代日本文学の関わりも始まった。そして、まもなくイギリスから帰り作家の道をたどった漱石に注目したのである。

二

1904年4月、魯迅は弘文学院速成普通科を修了して、9月仙台医学専門学校に入学した。在学中、人体解剖学を担当する恩師の藤野厳九郎から熱心な指導と親切な援助を受け、その思い出を胸に、晩年に有名な『藤野先生』を書いたことはすでに周知のとおりである。1905年「幻灯事件」をきっかけとして中国人の精神を変えようと決意したことは、後に医学をやめて文芸活動に転じたことに直接に関係していると思われる。1906年3月、魯迅は仙台医学専門学校を退学し、東京に戻り、独逸学協会学校に学籍を置いてから、文芸活動に身を投じた。

その時期、日本の文壇ではちょうど自然主義問題が盛んに議論され、自然主義文学の代表作が続々と世の中に出されているところであった。魯迅が東京に戻った年、島崎藤村の『破戒』が出版され、多くの反響を呼んでいた。翌年、さらに田山花袋の『蒲団』が世に出され、そして、『早稲田文学』『文章世界』『読売新聞』などで自然主義論が盛んに行われていた。しかし、いま見ることのできる資料によれば、魯迅はこの流行していた自然主義文学に対して特に興味を示すことはなかったのである。周作人の回想[9]を受けて、日本の代表的な魯迅研究者の竹内好はこう書いている。「当時は自然主義の全盛時代だが、かれは日本自然主義に興味を示さなかった。」[10] 一方、文学創作活動を開始したばかりの漱石に大きな関心を払ったことは明確な事実だと言える。これについて、周作人はかなり詳しい記録を残している。

> 魯迅の日本における生活は、壬寅（一九〇二）から己酉（一九〇九）に至る前後八年の長きに及んだ。しかもその中間の二、三年は、中国人が一人もいない仙台に住み、日本の学生と一緒にくらしたので、彼の語学力は留学生の中でも相当なものであった。だが彼は日本文学には少しも興味を感ぜず、ただ夏目漱石だけに感心して、彼の小説『吾輩は猫である』『漾虚集』『鶉籠』『永日小品』から、無味乾燥な文学論まで全部買込んだ。さらにその新作『虞美人草』を読むために、『朝日新聞』を購読し、その後、単行本が出版された時、又、一冊買った。漱石の外は、ロシア小説を主に翻訳していた長谷川二葉亭と、南欧文学を紹介する上田敏博士に注目していた。この二人が創作を発表すると聞くと、毎日、新聞に連載される『平凡』と『渦巻』の二小説を読んだが、実際は、彼の関心の的は作者であって、作品ではなかったから、その単行本をかおうとはしなかった。彼がなぜ漱石を愛読したかという問題には今は触れずにおく。要するに彼は好きだったのである。その後、彼は日本の文学者数名の小説を翻訳したが、その中で、『クレイグ先生』の訳がやはり最もすぐれていると私は思う。（周遐寿

（周作人）著、松枝茂夫・今村与志雄訳『魯迅の故家』279 ～ 280 頁、筑摩書房、昭和30年3月）[11]

ほかの箇所にも、同じような回想がある。「ただ夏目漱石が俳諧小説『吾輩は猫である』を出して有名であったことに限って、豫才（魯迅の字―筆者）は各巻の印刷本が出るのを待ってすぐに次々と買ってきて読んでいた」[12]。

後に最初の文学活動を回顧した際、魯迅自身も明確に書いている。

当時、もっとも愛読した作者は、ロシアのゴーゴリ（N.Gogol）とポーランドのシェンキェヴィッチ（H.Sienkiewitz）であった。日本のものでは、夏目漱石と森鴎外であった。（魯迅著、吉田富夫訳「私はどのように小説を創作し始めたか」）[13]

実際は、魯迅の生涯の中で、好きな日本作家は漱石だけではなかった。彼は白樺派の有島武郎、武者小路実篤に対しても非常に興味を持っており、芥川竜之介や菊池寛の小説をも翻訳したり高く評価をしたりしており、さらに理論家の厨川白村を激賛している。しかし、これらはみな後のことである。つまり、1906 年文芸活動に専念する頃から 1909 年 8 月帰国までの、二年あまりの東京滞在の間、魯迅はあくまでも漱石と森鴎外のみに高い関心を示したということである。それでは、その時点で魯迅はなぜ漱石を愛読し、どういう点で漱石に共感を感じたのだろうか。

魯迅の熱心な漱石への接近の根本的な理由はあくまでも、漱石の文学世界から彼の精神的な要求に対応できる要素を見いだすことができたことにあったのではないかと考えられる。すでに述べたように、文学をもって社会や人間の精神を改造する理想は、魯迅が医学を捨て、文学に従事しようとした究極の理由である。魯迅自身は次のように述べている。

日本に留学していたころ、私たちはある漠然とした希望を持っていた――文学によって人間性を変革し、社会を改革できると思ったのである。[14]

さらに、自分の「棄医従文」について、魯迅はこう語っている。

およそ愚弱な国民は、体格がいかにたくましく、いかに頑健であろうと、せいぜい無意味な見せしめの材料と見物人になるだけのことだ、どれだけ病死しようと、不幸だと考えることはない。だから、我々が最初にやるべきことは、彼らの精神を変えることだ、そして精神を変えるのに有効なものになれば、私は、当時は当然文芸を推すべきだと考え、こうして文芸運動を提唱しようと思った。[15]

そこから出発した魯迅の文芸活動の第一歩は、小説を書くことではなく、鋭くて激しい文明批評を世の中に送り出すことだったのである。まさにその文明批評こそ魯迅が漱石に近づいていこうとした接点だったであろうと思われる。

勿論、漱石の『吾輩は猫である』は様々な角度からいろいろな価値を見いだせる作品である。しかし、当時の読み手としての魯迅の心境、欲求から見れば、同時代文明を鋭く嘲笑批判するそのユーモアと笑いこそが自己に必要なものだっただろう。『吾輩は猫である』は、特に「作品後半に至って、単なる滑稽的茶化しではなく、露骨な文明批評的性格を帯びていく」[16] のである。漱石はその人間社会の礼儀や習慣になじまぬ猫の目を借りて、衆愚の滑稽な現実を思うさま嘲笑し、暗鬱な日常生活に風穴を開けただけではなく、その時代の文明に痛烈な風刺や批判を投じたのである。例えば、作品の終末近くに、「とにかく此勢で文明が進んで行つた日にや僕は生きてるのはいやだ」（十一）と、苦沙弥が慨嘆するところがあるが、この表現を待つまでもなく、作品の中心が現代文明への激しい呪詛というより、ほとんどその全否定にあることは明白である。とくにそれは物質文明とそれを代表する俗物に向けられる。[17] このユーモアに寄せた痛烈な社会文明批評と言えるものは、おそらく魯迅に大きな同感や反応を呼び起こしたと考えてよいだろう。

この時期、つまり 1907 ～ 08 年の間に、魯迅は一連の文化や文明批評に関する論文 [18] を世の中に送り出して、自分の「文明批評」の姿勢を鮮明に打ち出した。例えば、『文化偏至論』という論文の中では、当時の中国社会の暗くて凡庸な現実、とりわけ西洋文明の表層的な受容、即ち「物質文明」にのみ頼る「偏至」的な同時代文明の病的な有り様を感じて猛烈に非難をしている。

> 今日では、翻然と変革と思いたってすでに多くの歳月を経たが、青年たちの考えていることは、大体は古い文物に罪を着せることであり、はなはだしくは中国の言語や文字を野蛮だと排斥したり、中国の思想を粗雑だといって、軽蔑したりする。こういう風潮がさかんになると、青年たちはあわてて西洋の文物を輸入して古いものに代えようとしたが、……彼らの主張は物質文明だけに重きをおいている。物質文明を取り入れるのはまだよいが、その実態をみると、彼らが取り入れようとしているものは全く虚偽で偏向しており、役に立たないしろものである。[19]

そのため、魯迅は独自の見識を具えた「文明批評家」を強く期待しているのである。さらに、自ら文明批評をしようとし、ほとんどの文学活動をその文明批評的な態度で貫いた。したがって、魯迅の文学ははじめから文明批評という性格を持っていたと言える。

魯迅の文学者としての出発の明確な目的性と意識の構造は、彼の日本文学への接近のしかたに対して決定的な意義があり、つまり竹内好の言うように、「かれは日本文学から、自分にとって本質的なものを選んでいる」。[20] また、その「本質的なもの」とは、まさに千田

九一の理解しているとおり、「多少なりとも、理想を追い求めるもの、理想と現実のくいちがいに苦しく身もだえるもの、生きる希望に燃えるもの、人生の矛盾を直視するもの、そして何より、自分たちの民族の前途や社会の改革にとって切実と思われるもの、――そういった性格の作品に対する選択と吸収をかれら（魯迅と周作人――筆者）はますます強め、深めて行ったのである。」[21] 魯迅が文壇に流行している自然主義文学に冷淡な態度を見せ、かえって漱石に大きな関心や興味を示した理由も明らかにここにあるだろう。そのため、魯迅は自分の文芸活動を行う際、漱石から何らかの示唆を受け、何らかの必要なものを吸収したと考えても誤りではなかろうと思われる。

三

文学のために、魯迅は医学をやめ、仙台から東京に戻って、そして文壇に入ったばかりの漱石に引きつけられた。彼は漱石の作品に注目、そして耽読しているうちに、生活の中でも漱石に関わることが一度あった。

魯迅は仙台から戻ってから 1907 年春まで東京本郷区湯島町二丁目のアパート伏見館に住んでいた。次には、伏見館近くの中越館に引っ越した。そこでおよそ一年間暮らしていた。1908 年 4 月から本郷区西片町十番地ろノ七号に移った。

そのろノ七号はかつて漱石が住んだところである。荒正人氏の『漱石研究年表』によると、明治 39（1906）年 12 月 27 日、漱石は「本郷区西片町十番地ろノ七号（現・文京区西片一丁目十二、三番）に転居する。家賃二十七円（まもなく三十円）。」[22] それから帝国大学と一高をやめ朝日新聞社への入社を経て翌年の 9 月 29 日、牛込区早稲田南町七番地（現・新宿区早稲田南町）へ転居した。[23]

漱石が転居した半年後、つまり 1908 年 4 月 8 日から、魯迅はその「家」の一員になった。周作人の回想の中では魯迅の転居の由来及び当時の「ろノ七号」の様子がこのように書いてある。

> 許寿裳は本郷西片町十番地ろノ七号に、夏目漱石が住んでいた家を見つけて、無理矢理、友人を引張って頭数を揃え、魯迅も引張られて行った（もちろん周作人もはいる――筆者）。総勢五人だったので、門口の街灯に「五舎」と書いた。魯迅は一九〇八年四月八日に転居した。その日は雪が降ったので月日をはっきりと憶えているわけである。その家は確かに立派な家であった。やはり曲尺形で、南に二間、西に二間、どちらも十畳と六畳の大小二室ずつであった。曲がり角の処が玄関で、別に女中部屋が数間あった。[24]（周遐寿（周作人）著、松枝茂夫・今村与志雄訳『魯迅の故家』252 頁）

そして、このことの前後についてちょうど当事者の許寿裳はかなり詳しい記録を残している。

1908 年春、私は東京高等師範の勉強を終えたが、あいかわらず章先生の下で学んで国文を補習しながらドイツ語を習って、ヨーロッパへ留学に行くつもりであった。そのためにいい環境を探そうとしたところで、ちょうど本郷区西片町で一軒の瀟洒な家を見つけた。そこはもともとある日本人紳士の家で、大阪へ転居するため私に貸してくれたわけである。その家はかなりの規模で、部屋が新しくてきれいで、庭園が広く、花草の茂ることは特に気に入った。そして、家は坂上にあり、地勢がよくて、ちょうど小石川区の大道と平行している。もちろん眺めもすごくいいのであった。私は魯迅と彼の弟起孟、銭均夫、朱謀宣を呼んできて、五人は入った。高大な鉄門のそばの電灯に「伍舎」と書いた。

西片町は有名な学者住宅区であり、一軒一軒ほとんどみな博士であったり大学者であったりしている。ただ私たちの一軒は五人の学生の同居であった。にもかかわらず、私たちは家と庭園を非常にきれいに片づけている。家賃を集金する人は、それを見てとても満足したようだ。西片町から出て曲がると、東京大学の所在になる。赫赫たる赤門を多くの四角帽子群が入ったり出たりしていた。

……（「伍舎」を離れるとき）東坡の詩句を真似て『留別伍舎』を書いた。以下のとおりだ。

『荷尽已無陪雨蓋、菊残猶有傲霜枝』[25]。壺中好景長追憶、最是朝顔衰露時。[26]

（許寿裳『亡友魯迅印象記』28 頁）

この頃、魯迅には日本式の生活にもあまり抵抗感はなかったようで、下宿ではよく和机を使い、外出の時にも好んで和服に袴を着用して出かけたそうである。鼻下に髭をたくわえ紺ガスリの着物に袴姿の当時の写真なども残っている。三十年後、周作人はこう回想している。「私は東京に着いたら、魯迅と一緒に住んで、私たちの東京における生活は完全に日本的なものであった」。[27] しかし、「五舎」で十ヶ月位暮らしていたが、結局同居人のそれぞれの事情によって、五人の共同生活は解散した。1909 年 2 月頃、魯迅兄弟は同じ十番地のはノ十九号に引っ越した。

魯迅が漱石の住んだ「伍舎」での十ヶ月の生活の中で、漱石とどんな関わりがあったかについては、ほとんど資料がないため臆断することができない。しかし、とにかく前年から漱石の『虞美人草』を読むために、魯迅はわざわざ『朝日新聞』を購読した。そして、よく研究者に魯迅の散文詩集『野草』に影響を与えたと論じられる『夢十夜』は、魯迅が「伍舎」に住んでいた間に、すなわち 1908 年 7 ～ 8 月に連載されており、この時期の魯迅

の漱石に対する関心から考えてみれば、『朝日新聞』に連載していた『夢十夜』を読んだ可能性は非常に高いと思われる。

四

1909 年 8 月、魯迅は七年間の留学生活を終え、中国に戻った。それ以来、自らの周りの状況は日本に滞在したときと大きく異なって、漱石に関わる余裕もあまりなかったようだ。この状態は 1923 年魯迅と周作人の共訳した『現代日本小説集』の出版まで続いた。

『現代日本小説集』（上海商務印書館、1923 年 6 月）の中で、共訳者としての魯迅がうけもったのは次の六作家十一編である。

夏目　漱石：「懸物」「クレイグ先生」
森　　鴎外：「あそび」「沈黙の塔」
有島　武郎：「小さき者へ」「お末の死」
江口　　渙：「峡谷の夜」
菊池　　寛：「三浦右衛門の最後」「ある敵討の話」
芥川竜之介：「鼻」「羅生門」

周作人の訳したものは九作家十九編である。[28] 作品を選んだ基準と経緯について、周作人は「序」の中にこう説明している。

> 私たちの方法は、すでに定評のある人と著作の中から、自分の理解し感受し得るものを選んで、この集に入れることであった。だから、私たちの選んだ範囲はもしかするといささか狭いのかもしれないが、この狭い範囲にはいる人及びその作品はすべて永久の価値をもつものだ。

すなわち、魯迅と周作人の翻訳に際しての作品の選び方が、日本文壇での一般的評価を基準とせず、個人的趣味に相当に依拠していたということであろう。興味を持つがゆえに、その作品の翻訳をし、そして何らかの影響を受けたことも容易に推測できるだろう。例えば魯迅の場合、後の『藤野先生』と漱石、特に『クレイグ先生』との関わりはすでに日本の研究者にも指摘されているとおりである。[29]

『現代日本小説集』の巻末に作家の紹介が付いている。漱石に関しては、一般の伝記的事実の紹介以外に、魯迅は次のように書いている。

> ……彼が主張したのはいわゆる「低回趣味」で、また「余裕のある文学」とも称し

た。

（中略）

夏目の著作は想像力は豊かで、文辞が美しいことで知られている。初期に書かれたもので、俳諧雑誌『ホトトギス』（Hototogisu）に載った『坊ちゃん』（Bocchan）、『吾輩は猫である』（Wagahaiwa nekode aru）の諸篇は、軽快洒脱で、機智に富み、明治文壇における新江戸芸術の主流であり、当世に並ぶ者がない。

「掛物」（Kakemono）と「クレイグ先生」（Craig Sennsei）はいずれも『漱石近什四篇』（一九一〇）の中に見え、『永日小品』の二篇である。（魯迅著、小谷一郎訳「『現代日本小説集』付録　作者に関する説明」）[30]

「余裕のある文学」について、魯迅は漱石が高濱虚子の小説集『鶏頭』（春陽堂 1908 年 1 月）のため書いた「序」を引用し、説明している。その上、魯迅は主に芸術の角度から漱石文学の特徴のようなものを捉えようとしているようで、特に漱石の小説をいわゆる「新江戸芸術の主流」として見ている。しかし、このような見解は少なくとも中国人文学者としての魯迅の個人的な見方だけでなく、あくまでも日本文壇の既成の指摘や評価に即したものだろうと考えられる。周知の通り、『吾輩は猫である』は明治 38 年 1 月から同 39 年 8 月まで、雑誌『ホトトギス』に十回にわたって断続的に連載されたのである。39 年 12 月、評論家の大月桂町は早くも次のような見解を述べた。

夏目漱石、猫で売り出して、この頃は、文壇のはやりッ子也。『吾輩は猫である』一篇、文壇の単調を破りて、寂寞を破りて、在来、未だ曾て見ざる滑稽物也。殊にきはだちて見ゆるは、江戸趣味を解せること也。江戸趣味の特徴とし、軽快洒脱、行文はきはきして、ぴりりと人を刺し……その高尚にして上問なるが在来の滑稽物に比して一頭地を抜くところにして、長処即ち茲にあり。[31]

さらに、文壇内外からも『吾輩は猫である』は発表されてから、注目され、多くの反響をあつめた。漱石がなくなった翌年の大正 6 年 6 月、小林愛川の『明治大正文学早わかり』が出されているが、著者は漱石の小説それぞれについて、特徴を抽出している。「その出世作は『吾輩は猫である』の一篇で、これは猫の観察に託して、一紳士の家庭交友の状を細かに描けるもので、その軽快な滑稽的な作風は頗る世を騒がした。」「『虞美人草』や『草枕』はその豊富な才藻を以て世を驚かしたもので、空想の露わな作品である」[32] という。この二つの評論だけ見ても、想像力（空想）、文辞（才藻）、軽快洒脱、江戸趣味というようなことはほとんど論じられているのである。ただ、それまでの漱石評価はおおむね肯定的であったが、しかし基本的に「文章の妙、詞藻の豊富」のような文章家としての評価であり、漱石は近代作家としては必ずしも重く見られなかった。そして、それらの漱石批評は漱石

文学の思想的価値をきちんと把握することができなかったのである。それは大体同時代批評の限界だったと言える。[33] 魯迅の紹介がこのような同時代批評文章の観点に直接に関係しているかどうか判断しがたいが、しかし、両者の類似は明白なので、魯迅が少なくとも、漱石を翻訳紹介する際、自分の知っている、あるいは手元にある日本文壇における漱石評論、特に同時代批評に依拠したことはおそらく間違いないであろう。[34]

もちろん、このように異国の文学者、文学作品を翻訳、紹介する場合、その国の研究者によって一般になされている見解を借りることは十分に理解できるが、一方、そうした見解から距離を置き、漱石に対する独自の感覚、評価を語ることは、魯迅にはできなかった。

しかし、魯迅の小説、特に『阿Q正伝』の風刺嘲笑、滑稽軽快という特徴を見ると、漱石の『吾輩は猫である』を思い起こすことができるであろう。魯迅が一体漱石からどのぐらいの芸術的な滋養を吸収したかに関しては、明言はできないが、周作人の述べているように、「豫才が後日作った小説は漱石の作風に似てはいないけれども、その嘲笑中の軽妙な筆致は実に漱石の影響を相当強く受けているものであ」る。[35] しかも、その「魯迅の小説から明瞭な『吾輩は猫である』の痕跡が見えないにもかかわらず、そこから多少の影響を受けたことを、生前に魯迅自らも認めているのである。」[36]

おわりに

魯迅の蔵書における日本近代文学者の作品を調べてみると、漱石の作品がかなり目立っている。現在確認できるものだけでも、少なくとも十四冊ある。すなわち、岩波文庫の『坊ちゃん』、新潮文庫の『漫画吾輩は猫である』『漫画坊ちゃん』及び昭和 11 ～ 12 年岩波書店版の『漱石全集』18 冊内の 11 冊が見られるということである。

魯迅の漱石への指向は文学だけではなく、さらに人格、人生そのものにまで及ぶものと言える。後のことであるが、かつて北京大学で魯迅の講義を受けた文学者孫席珍は次のように回想している。

> 魯迅が北京大学で『中国小説史』という講義をしたとき、夏目に触れたことがあると覚えている。漱石は現在に執着し人生を愛している。そして、人生に対する態度が一貫してまじめなものであり、旅先の食事さえも決していいかげんなことをしない。汽車に乗るときでも船に乗るときでもテーブルが小さいにもかかわらず、必ず茶碗、箸などをきちんと並べて食事をするという。[37]

以上をまとめれば、魯迅と漱石との関わりに関する資料がかなり限られているにもかかわらず、魯迅の思想、人格、芸術の面で、一つの影響要素として何らかの段階で、何らか

の形で漱石からプラス的影響を受けたことはすでに明らかになってきたと思われる。例えば魯迅の『阿Q正伝』と『吾輩は猫である』、『野草』と『夢十夜』などの間の影響関係はしばしば中国と日本の研究者に取り上げられているとおりである。換言すれば、自主的に日本の文化・文学を受け入れた魯迅にとって、漱石はやはり最も大きな存在であろう。

そして、異なった国、民族、文化に所属する代表的な文学者として、魯迅と漱石はいくつかの実際の関わり、影響関係が存在しているだけでなく、さらに一方、国籍を異にする二人の文学においても、外面はともかく同じ人間の作り出したものであるから、根本においては共感し理解できるところ、つまり共通点があるだろう。同時に、それぞれの民族の伝統、文化、観念、美意識などを土壌とすることから、さまざまな相違点も当然に免れないのである。こうした意味で、魯迅と漱石という個別の文学者をより深くかつ細かく比較することは、日本と中国の近代文学、ないし近代文化への一層の理解に役に立つだろう。

【附記】魯迅の引用はすべて日本語訳『魯迅全集』(学習研究社、昭和59＜1984＞年11月～61＜1986＞年8月) による。

---

1 日本と中国では、近代（近代文学）及び現代（現代文学）という言葉が社会通念として含む意味にある種のずれがあると思われる。中国では、近代文学は、通常アヘン戦争(1840年）から五・四運動（1919 年）の前までの文学を指しているが、それ以後 1949 年の中華人民共和国建国までの文学は現代文学として別に取り扱われ、両者ははっきり区別されている。詳細は丸山昇・伊藤虎丸・新村徹編『中国現代文学事典』9 頁を参照、東京堂出版、昭和60年9月。

2 竹内好「魯迅と日本文学」、『魯迅雑記』11 頁、世界評論社、昭和24(1949)年6月。

3 許寿裳『亡友魯迅印象記』5 頁、人民文学出版社、1953年6月、筆者訳。バイロン(Byron,George Gordon 1788～1824)の作品の日本語訳について、その頃、すでに『二人が袖を分つ時』(無適訳、松栄堂書店、明治33年7月)、『艶美の悲劇詩　パリシナ』(木村鷹太郎訳、松栄堂書店、明治36年）などがあったという。

4 この小説は、明治13年11月に初めて大阪にある三木書楼によって出版された。しかし、魯迅が底本とした訳本（東京、自由閣、1886＜明治19＞年9月）では、「米国ジュールス・ベルン氏原著、日本井上勤訳述」となっており、魯迅はこれにしたがって米国、理査徳・培倫と訳したのである。『魯迅全集』第 12 巻 213 頁、藤井省三氏の訳注を参照。

5 周作人（1885～1967)、魯迅の弟、散文作家、翻訳家。1906年日本に留学。法政大学、立教大学を経て、日本人女性と恋愛結婚。1912 年帰国。後に新文化運動に参加し、新文学の形成に大きな貢献を果たした。1906年、彼が兄の魯迅に連れられ東京に来てから1909年魯迅の帰国まで、兄弟は起居を共にし、一緒に雑誌を出したり、翻訳をしたりして、互いにその文学生活をよく知っていた。魯迅の青年時代を知る上で、周作人の証言はま

たとない資料である。ここに挙げている『魯迅的故家』、『魯迅小説里的人物』及び『魯迅の青年時代』などは、魯迅研究資料としてまとめられ、信用性の高いものとされている。

6 周啓明『魯迅的青年時代』、中国青年出版社、1957年3月、筆者訳。『進化と倫理』(Evolution and Ethics,1894) とは、進化論の普及と擁護に努めたイギリスの生物学者ハックスリ (1825～95) の著作である。魯迅が読んだのは、1898年に出版された『天演論』を題名とした厳復による中国語翻訳であった。

7 中島長文編刊『魯迅目睹書目』21頁を参照、1986年3月。

8 これも日本と関係のあることであると十分に考えられる。根拠として、例えば、よく言われるように「日本人ほど自らの国民性を論じることを好む国民は他にない」(南博『日本人論—明治から今日まで』、岩波書店、1995 年 1 月) ということであり、特に明治維新以来国民性論としての日本人論は盛んに行われた。魯迅が国民性の問題を提出したときも同様であったため、そうした文化的環境、雰囲気の影響は軽視できないだろう (日本人論をしばしば掲載し当時影響の大きかった雑誌『太陽』を魯迅も読んだことがあった)。 参考として、その頃のいくつかの日本人論を挙げておきたい。浮田和民『国民の品性』(『日本人』三次 140 号 1901 年 6 月)、『島国根性と海国思想』(『日本人』三次 159 号 1902 年 3 月)、田和民『偉大なる国民の特性』(『太陽』8 巻 10 号 1902 年 8 月)、『日本人の性質』(『日本人』三次 191 号 1903 年 7 月)、井上円了『日本人の短処』(『太陽』9 巻 14 号 1903 年 12 月)、苦楽道人『日本国民品性修養論』(明治修養会 1903 年 12 月)。他には、魯迅が弘文学院に在学したとき、同じ在日留学生の楊度という人が弘文学院長の嘉納治五郎と「国民性」について討論を行った。これも魯迅が国民性の問題に注意を促すきっかけの一つになったかも知れないと思う。

9 「魯迅に関しての二」(周作人著、松枝茂夫訳『瓜豆集』<創元支那叢書 5 >) 300 頁、創元社、昭和 15 年 9 月) の中では、周作人は次のように記している。「島崎藤村などの作品は全然顧みず、自然主義盛行時代にも、田山花袋の『蒲団』と佐藤紅緑の『鴨』とを一読したきりで、あまり興味は感じなかったらしい。」

10 竹内好「魯迅文集・第一巻<解説>」、『魯迅文集・第一巻』(竹内好訳) 449 頁、筑摩書房、1977年2月。

11 周遐寿 (周作人)『魯迅的故家』279 ～ 280 頁、上海出版公司、1953 年 5 月。本稿のそれに関する引用はすべて松枝茂夫・今村与志雄訳『魯迅の故家』(筑摩書房、昭和 30 年 3 月) によっている。

12 前掲周啓明『魯迅的青年時代』。

13 魯迅「私はどのように小説を創作し始めたか」、『魯迅全集』第 6 巻 342 頁。

14 魯迅「域外小説集・序」、『魯迅全集』第 12 巻 220 頁。

15 魯迅「吶喊・自序」、『魯迅全集』第 2 巻 11 頁。

16 中村真一郎「夏目漱石・解説」、『夏目漱石』（小宮豊隆著、岩波書店、昭和 28 年 9 月）所収。

17 上田正行「『吾輩は猫である』試論」を参照。『漱石作品論集成第一巻・吾輩は猫である』123 頁、桜楓社、1991 年 3 月。

18 その中には次の主なものがある。「人間の歴史」、「科学史教篇」、「文化偏至論」、「摩羅詩力説」や「破悪声論（未完）」（在日河南省留学生の編集した雑誌『河南』第一～八号、1907 年）など。

19『魯迅全集』第 1 巻 84 頁。

20 前掲竹内好『魯迅雑記』11 ～ 12 頁。

21 千田九一「日本文学と魯迅との関係」、『文学』（岩波書店）第 24 巻第 10 号 32 頁、1956 年 10 月。

22 荒正人『漱石研究年表・漱石文学全集　別巻』264 頁、集英社、昭和 51 年 10 月。

23 前掲『漱石研究年表・漱石文学全集　別巻』282 頁によれば、漱石が西片町を離れた理由の一つは「西片町の家主が最初は二十七円まもなく三十円にし、さらに十月から三十五円に値上げるというので憤慨していた」からという。後に魯迅たちがそこから引っ越した理由も主に家賃の高いことにあるからのようである。ただ、家賃の具体な金額は不詳である。「伍舎」の存続はたんへん長いもので、1982 年冬に老朽のため取り壊された。これについて、『魯迅全集・第一巻』第一号（昭和 59 年 11 月）参照。

24 前掲『魯迅的故家』252 頁。

25 中国の宋代の著名な詩人蘇軾（1037～1101）の詩「贈劉景文」における二句である。詩の全体は以下の通り。「荷尽已無陪雨蓋、菊残猶有傲霜枝；一年好景君須記：正是橙黄橘緑時。」『蘇軾詩選』223 ～ 224 頁を参照、人民文学出版社、1957 年 12 月。

26 前掲『亡友魯迅印象記』28 頁、筆者訳。

27 周作人「留学の回想」、『薬堂雑文』94 頁、新民印書館、1945 年 1 月。

28 以下の通り。国木田独歩「少年の悲哀」「巡査」、鈴木三重吉「金魚」「黄昏」「写真」、武者小路実篤「第二の母」「久米仙人」、長与善郎「亡き姉に」「山の上の観音」、志賀直哉「網走まで」「清兵衛と瓢箪」、千家元麿「深夜のラッパ」「バラの花」、江馬修「小さい一人」、佐藤春夫「私の父と父の鶴の話」「黄昏の人間」「形影問答」「雉のあぶり肉」、加藤武雄「郷愁」。

29 平川祐弘「クレイグ先生と藤野先生―漱石と魯迅、その外国体験の明暗―」（『新潮』第七十巻第二号、昭和 48 年 2 月）を参照。

30『魯迅全集』第 12 巻 281 ～ 282 頁。

31 大町桂月「雑言録」、『太陽』、1905 年 12 月。

32 小林愛川『明治大正の文学早わかり』（文章入門叢書 2）91 ～ 93 頁、新潮社、大正 6 年 6 月。作者の小林愛川とは、即ち当時の新潮社の編集部におり、「文章倶楽部」を主宰し、

ひろく日本文壇を文壇的常識を持って見渡していた若い小説家、加藤武夫であった。

33 石崎等「夏目漱石研究史大概」、『群像　日本の作家 1　夏目漱石』367 ～ 368 頁を参照、小学館、1991 年 2 月。

34 明らかに日本文壇の既成の見方を援用していることを考えると、例えば中国の研究者が魯迅の「夏目漱石に対する評価はあまり正当でないもの」（劉柏青『魯迅と日本文学』85 頁、吉林大学出版社、1985 年 12 月）という判断は一種の誤解と言えるであろう。

35 前掲周作人著、松枝茂夫訳『瓜豆集』（創元支那叢書 5）300 頁。

36 前掲『魯迅的青年時代』。

37 孫席珍「魯迅と日本文学」、『魯迅研究・5』135 頁、中国社会科学出版社、1981 年 12 月、筆者訳。